海外心理学研修

心理学科　K. H.

私が海外研修に参加した目的は、多様性を大事にする文化を持つカナダでどのような教育・サポートが行われているのか、何が日本と違うのかを学ぶことでした。実際にカナダの小学校や特別支援学校で研修させていただき、先生方からお話を聞く中で、今までになかった、あるいは気にしたことがなかったような考え方や視点を学ぶことができました。

研修に行かせていただいた小学校は、本当に素晴らしく理想の塊のような学校でした。移民の子どもに対する学習のサポート、発達がゆっくりな子どもや障害を抱える子どもたちへのサポート、子どもの親に対する学校側からの支援など、沢山の取り組みがなされていました。小学校では、子ども一人ひとりが必要とする支援を適切に提供するために、個人の学習プログラムなどが組まれることにも驚きました。その取り組みの中でも、子どもたちに障害や人種などへの偏見や差別意識を持たせないための工夫が普段の生活の中に組み込まれていることにとても驚かされました。また、怒りなど、マイナスな感情も含め、言葉でしっかりと人に伝える方法を教えていました。子どもたちの行動の全てをコミュニケーションと考え、自分の感情をコントロールする術を身に着ける練習も行われていました。障害の有無にかかわらず、まず一人の個人として考え、その子どもの能力を最大限引き出そうと一生懸命だったカナダの学校の先生たちの姿は本当に素敵でした。

また、充実した教育・支援が、国や教育委員会などの組織からの厚いサポートによって支えられていることや、教育や支援に携わる先生やカウンセラーなどが、しっかりとした収入で生活が保障されていることなど、たくさんの要因から成り立っていることが分かりました。日本では、義務教育期間の授業料の無償化や教科書の無料配布などがありますが、教育方針は国が作っており、それに沿ってほぼ同じ教育がなされているように思いました。

この研修で私が最も印象に残ったことは、“偏見がない”のと、“意識して特別に優しくする”のとは違うということです。これは、以前から私が引っかかっていた事でもありました。優しさの中に健常者と障害者という壁はなく、仲間として助けが必要な時には手を差し伸べあうという、当たり前のことのようで簡単ではないことが自然に行われていました。障害を受け入れ、支援していくことが“特別扱い”になってはいけないと思いつつも、どうなるのが良いのか分からずにいました。その答えがこの研修で見つけられたように思います。

海外研修を終えて、いま私がすべきことは日本の教育や支援、それを支える制度や組織についてもっと学ぶことだと思います。心理学的な側面だけでなく、国はどのような教育方針を持っているのか、税金がどのようなことにどれだけ使われているのかなど、まだまだ知らないことがたくさんあります。今後、日本についても学び、カナダで学んだことをどのように生かしていくのかを探していきたいです。